

熊野古道の茶屋

熊野古道を通る参詣者は、道中「茶屋」と呼ばれる店で休憩と軽食をとりました。中には宿泊場所も提供した茶屋もありました。王子社と呼ばれる熊野古道沿いの諸神社の多くも似た役割を果たしていましたが、茶屋は宗教とは無関係の性質のものでした。

熊野の茶屋の最盛期は江戸時代（1603－1867）で、当時の熊野詣の手引書には頁全面に描かれた有名な茶屋でくつろぐ参詣者の挿絵がよく見られました。1868 年の明治維新後、日本中の宗教的・社会的変化に伴って熊野への参詣者は激減し、やがて、便利な場所にあった店以外、全ての茶屋が廃業しました。数軒の茶屋は観光客のための休憩所として再建されましたが、ほとんどの茶屋の跡地には半分地中に埋まった基礎だけが残されています。

大雲取越

大雲取越は、熊野那智大社と熊野本宮大社を結ぶ「雲取越」という峠道の一部です。雲取（cloud-catching）は、海岸沿いに船で熊野へ向かう経路に対して、山を越えるこの経路の高い標高を指しています。大雲取越沿いにある茶屋のいくつかをご紹介します。

登立茶屋

登立茶屋は、大雲取越で那智に最も近い茶屋でした。この茶屋は市場としての役割も担っており、那智の漁村に暮らす人々と内陸部にある田辺の商人たちがそれぞれの商品を交換するためここに集まりました。登立茶屋は地元の住民の日常生活に溶け込んでいたため、人々はこの場所を単に「馬つなぎ」と呼んでいました。

舟見茶屋

舟見茶屋は、南に那智勝浦と太平洋の絶景を望む舟見峠の頂上に位置していました（舟見とは「舟を見る（ship-watching）」という意味）。本宮地域から大雲取越を通して熊野那智大社に向かう参詣者にとって、ここは最初に目的地の姿を遠望できる場所でした。また、本宮に戻る人々にとっては、振り返って那智に最後の別れを告げる場所でした。いずれの場合も、参詣者たちは茶屋で足を休め、海拔 800 メートルの大パノラマの景色を楽しみました。現在、かつて茶屋が建てられていた礎石の上にはあずまやが立っています。

地蔵茶屋と地蔵堂

地蔵茶屋は大雲取越のちょうど中間地点にありました。もとの茶屋は 1921 年に廃業し、荒れるがままになっていましたが、2004 年、世界遺産となった熊野古道の参詣者の休憩所として、新しい建物がこの場所に建てられました。木製の調度品や囲炉裏をあしらった内装は、大雲取越沿いにあったもとの茶屋をイメージしたものです。

地蔵茶屋の名称は、近くにある地蔵堂にちなんでいます。地蔵堂は 1707 年に大阪にある堺の町の魚商人によって建てられました。このお堂には旅人を見守る仏、地蔵菩薩の像が 32 体安置されています。建物は 2015 年に建て直されましたが、像は当時のものです。像はもともと 33 体ありましたが、長い年月の間に 1 体が行方不明になってしまいました。このお地蔵さまは熊野古道を歩き回り、困っている参詣者を密かに助けているとも言われています。